市芦救援会通信

市芦救援会通信 通巻39号 90／3〈1部100円〉 発行人 玉本 格
市芦救援会 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 TEL 0797(32)1131
市芦反弾圧闘争を支援する会 〒650 神戸市中央区元町通5丁目3の16 テーラビル3F

日程 第25回審理 4月12日(木)AM10 小林証人反対尋問

市芦の定員内大量切り捨てを許すな!!

市芦救援会事務局

三月二〇日、市芦高校の入試合格発表がありました。定員一四一名、受験者一四〇名に対して、一二名が不合格です。松本教育長による「教育改革」が行なわれ一九八七年・八八年につづいて三度目の定員内大量切り捨てを行なったのです。

入試に先だち、「定員充足」を主要な柱とする申し入れが、芦教組・市芦分会・芦屋教育共闘会議・芦教組三中学分会連名そして芦屋地労協によって芦屋市教委と市芦管理職に対して行なわれていました。そして、三月一六日入試当日の地労協五役による市教委交渉の席で、指導部長が「定員内不合格はおこらないと思う」と答えているのです。

また、三月市議会においても、「教育改革」がいかに多数の生徒を切り捨ててきたのかという追及が行なわれました。具体的な生徒数をあげての追及に、松本教育長は答弁に窮し、「教育改革」の破綻は市議会においても明らかにされました。

公教育としての「生徒の教育権保障」を求めて、「教育改革」批判が行なわれている中での定員内切り捨てであるのです。兵庫県教委による「定員を充足するよう十分配慮せよ」との通達を、三度も破っているのです。

芦屋市教委は、多くの生徒・市民の教育にかけた願いを平然と踏みにじり、「競争原理」のみに依存して生徒選別をくり返すことで、「エリート育成」をはかろうとしているのです。

も／く／じ

市芦の定員内大量切り捨てを許すな！ …… 市芦救援会事務局 …… 1
市芦・芦屋市教委への申し入れ書 …… 芦教組三中学分会／芦屋地労協／市芦分会 …… 5
障害児の定時制進学を保障せよ 定時制通信制の統廃合を許すな …… 市芦救援会事務局 …… 7
尼崎南高校良元分校への要望書・抗議書 …… 宝塚障害児・者問題何でも話す会 …… 9
署名本当にありがとう …… 大谷喜久 …… 14
高校って、ええんやなあー …… 永岡英子(麦の家) …… 15
アジアスワニー労組への支援と治療費のカンパをお願いします …… 市芦分会 …… 18
「さわやかな一陣の風」 …… 崔 孝行 …… 19
アジアスワニー労組と連帯して …… 全港湾建設支部 中村 猛 …… 20
国労清算事業団の首切りを許すな …… 市芦救援会事務局 …… 22

「教育改革」の破綻

「教育改革」は、入試における選別―切り捨ての後、入学後は「一人一人の能力・適性に応じた教育」という名の下に、大量の留年生・中途退学者を生み出してきました。

三年前の入試で定員内で三三名も切り捨て、「教育改革」初年度の「新生市芦一回生」として「期待」された生徒達が今春二月に卒業しました。入学後の大量切り捨てにより、卒業できた「一回生」はわずかに七四名でした。定員一四一名の半数にしかすぎません。

「改革」前は、毎年一二〇～一三〇名が卒業し、その中の約三割は大学に進学していました。しかし今年はわずか二名にすぎません。

松本教育長は、「大学進学率を上げる」、「市芦は組合による支配で生徒指導ができてない」として「教育改革」を「断行」しました。その結果がこの数字なのです。

「教育改革」は、一挙に一一名もの教員を削減、任命主任制を導入しての校長職務命令による校務運営、点数による「能力別学級編成」等として行なわれてきました。

「命令と服従」による職場支配は、三年間に一度も職員会議を開かず、教員の自主的で創造的な教育活動を抑圧してきました。

そして、生徒もひたすら管理対象とされ、生々とした自主活動・学習への意欲は次第にそぎ落されてきたのです。

「教育改革」は、そのすべてが「組合つぶし」のために準備されたために、このような教育荒廃のみを生み出したのです。

今年度の市芦入試をめぐるさまざまなとりくみについて、以下要約しておきます。

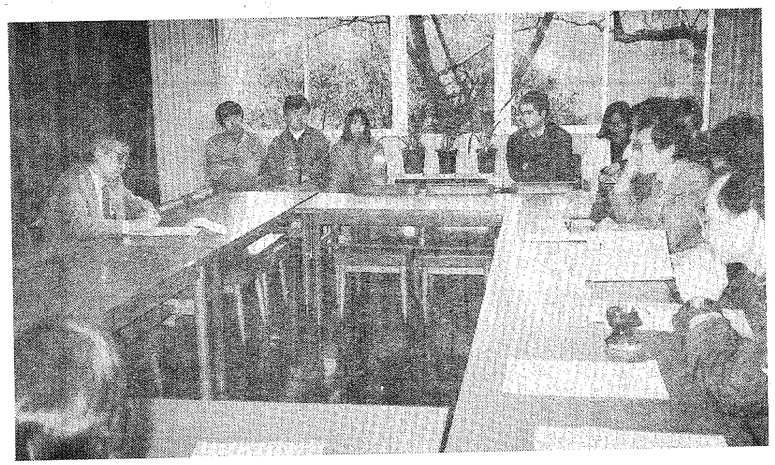
広がる共闘の輪

「教育改革」の生徒切り捨ての実態が次々と明らかにされていく中で、昨年度入試について芦屋教育共闘会議や芦屋地労協も、「定員を充足し、教育権を保障せよ」との要求をかかげてのとりくみを行なってきました。

街頭署名、ビラ配布、そして対市教委交渉が行なわれた結果、定員充足・強制配転阻止をかちとることができました。

しかし、今年度について、すでに通信でお知らせしているように、兵庫県教委による「中間報告」が出されて、状況はきびしくなっています。定時制通信制高校の統廃合、神戸第一学区と芦屋学区の再編の動きは、生徒の切り捨てを一層すすめるものといえます。

市民の子弟のことなど眼中になく、県の下僕である松本教育長は、県の方針を推進するために、市芦へ中傷を加え、エリート校進学の幻想をあおっています。



市芦入試における定員充足は、公教育の責務をいま一度明らかにさせる意味でも重要な意味をもつことになります。

去る二月二八日、芦教組の三中学分会の連名による、「定員充足・進学保障完全実施」の申し入れが市芦管理職に対して行なわれました。市芦分会、教育共闘会議も合流しての

共同行動となりました。

市芦校長が逃亡して不在のなか、教頭に対して約三〇名の参加者による申し入れ・交渉が整然と行なわれました。しかし教頭は「校長に伝えるだけです」と居直るのみで、現場責任者の一人としての対応をみせませんでした。参加者からは怒りの声が集中しました。

申し入れ後にもたれた組合員の交流会では、市芦改革のすさまじい実態や、中学校における生徒の進路公開のとりくみ等が交流されました。困難な状況下でも生徒の進路に必死の想いをかける教師の交流で、短時間でも共同行動の中で元気の出る取り組みとなりました。

「学区再編」反対のとりくみ

「学区再編」については、昨年秋頃から市教委が、一部PTA役員を使っての「地区説明会」を行なってきています。表面上は県の答申の説明会としつつ、「芦屋学区は三校で少なく、神戸第一学区との合併で、志望校選択の巾が広まる」という点を強調する宣伝をくり返し行なってきました。それは、一部の市民の中にある「神戸のエリート校にいける」という意識をくすぐり、多くの親のもつ「いい高校へ」という願いをすりかえるものです。

芦屋の公立高校開門率が六三%位で、神戸より一〇%以上高く、学区併合により芦屋の子供が公立高校から締め出されるという事実はおし隠されてきました。さらに、「競争と緊張感が必要」として、受験戦争の過熱をあおっています。高校全入推進のための公教育の責務は放棄されているのです。

また、市内で行なわれたPTAへの講話の中で、「今の市芦には行かせたくないと思っておられるでしょう」と松本教育長が発言しています。自から「市芦教育改革」と称して、多くの生徒の切り捨てをすすめ、組合つぶしを強行するために大量の教員を削減し、教育荒廃をつくり出してきた張本人の発言としておどろく他はありません。

公教育行政の責任者として、あまりの無責任さを見せつけられた市民の方々の中から、学区再編の反対の声が上がってきました。

この間、教育井戸端会議に参加し、意見を交換する中で子供をもつ親・市民の立場からの疑問・不安をぶつけようと、「芦屋の教育を考える市民の会」としてビラを市内に配布するとりくみがおこなわれています。

「教育とは」「高校教育の中味とは」をじっくり考えようという訴えを基本にされています。松本教育長が得意とする、一部PTA役員を利用した独善的世論操作とは対照的に、市民の良識にあくまで訴える内容といえます。

また、教育共闘会議も公教育行政としてすべての子供を包込み育てる責務があることを訴え、定員充足等の駅ビラ配布をしました。

芦屋地労協、原職復帰要求を掲げて交渉

このような市民・教組を中心とするとりくみと並行して、芦屋地労協としてのとりくみも行なわれました。

昨年要求の「市芦定員充足」とあわせて「芦屋学区の独立」も掲げています。さらに、「強配された教員の原職復帰」をはじめて要求項目に入れた市教委への申し入れを機関決定しました。地域共闘の軸としての地労協の闘いの強化といえます。三年におよぶ反弾圧闘争の持続の中で、一層の共闘の輪が広がり強化されています。

三月一六日、反行革・反臨教審・国労連帯をかかげて、芦屋地労協春闘総決起集会が開かれました。その集会に先立って市芦に関する地労協五役の対市教委交渉がもたれました。

市教委は、定員充足について「学校長の権限ではあるが、定員内の不合格はおこらないと思う」との見解を表明。さらに原職復帰問題については、「公平委審理中である」として回答を拒否しました。しかし、「本来労使交渉で解決すべき問題であり、市教委のこの間のやり方は市当局の対話路線とは逆行するものだ」との批判がなされました。

行革・合理化と闘う地域の労働者や市民と

共に、今後ともねばり強く、原職復帰を求める闘いをつづけていくことが大切です。

定員内切り捨て抗議集会

三度目の定員内大量切り捨てに対し、芦教組・市芦分会等の抗議がつづけられています。三月二〇日に行なわれた芦教組四役と市教委の交渉で、再募集措置をとるようにとの提言書を提出し、「落ちた子供の進路について、中学校・生徒・親と話合って努力する」との、指導部長の回答を引き出していました。

二二日夕方には、突然の呼びかけにもかかわらず、芦教組・市芦分会・急をきいてかけつけた市民ら約五〇名余による市教委前抗議集会が開かれました。集会参加の芦教組・中学代表・市芦の代表団によって、すぐさま市教委交渉がもたれました。幹部は不在でしたが、対応した学校教育課の指導主事との交渉で、市教委の姿勢が明らかにされました。

一六日の地労協との交渉で「定員内切り捨てはしない」と指導部長が発言している点について、「中学校に対し、生徒の生活指導・学力向上のとりくみをすること。不合格の時は定時制の二次をすすめること」等を指導したと居直りました。また、一二名の切り捨てられた生徒の再募集による入学要求に対しては、「再募集はしない」と拒否しています。

引きつづき抗議行動をすすめるため、集会参加者による市内各駅での抗議ビラ配布が行なわれました。

「教育改革」で追いつめられる生徒たち

この三年間の「教育改革」は、中学校での進路指導を一層困難なものにしています。

定員内大量切り捨て、入学後の切り捨ては、後輩の中学生達に、得体のしれない不安感のみを与えてきました。かつては、中学で一時的に生活態度が少々荒れたとしても、市芦に受け入れる条件があり、学年・職員集団による全体的なとりくみ、クラスにおけるとりくみも行なわれてきました。そして、「生きる力」をつけてたくましく育ち、就職・進学へと巣立っていく生徒は数多くいました。その事実に出会う中で、生徒集団も教師も変わり、むしろ多様な人間の生き様に体でぶつかり合うことの大切さを学んできたのです。一人一人の学習意欲もそのような中でこそ高められてきたという事実もたくさんあるのです。

しかし、この三年間での市芦教育の変わり様は、中学生の高校進学にかけた思いを打ちくだくだけでした。「努力」の前に「あきらめ」だけをうえつけ、ついには定時制をも含めて、「高校非受験」生徒をも生み出しているのです。従来ではあまり考えられなかった傾向といえます。

そのような中でも、必死に高校にたどりつこうとした一二名の生徒が切り捨てられたのです。ほんの数年前まで、高校進学の機会を与えられ、教育権の保障がなされてきた生徒たちが、教育長が交替したからといって、その権利・機会を奪われて良いはずがありません。

点数による内申のみで進路が決められ、閉ざされるなら、「進路指導」はいりません。

生徒の生活上に起因した生活態度などの荒れようが、「犯罪」であるかのようにして警察が教育現場に次々と介入するなら、「生徒指導」はいりません。「一五の春」を泣いても仕方がないという切り方は、教師の日常的しんどさの中で、たくみに入りこむのです。

子供たちをここまで追いつめた、市教委の「教育改革」にこそ批判を強めていかねばなりません。

資料1　市内三中学分会申し入れ書

一九九〇年二月二八日

芦屋市立芦屋高等学校長　泥純一殿

兵庫県教職員組合芦屋支部

精道中分会　分会長　加納健次

山手中分会　分会長　尾崎政和

潮見中分会　分会長　梅田和枝

被差別的状況に置かれている生徒を中心にすえながら、総ての生徒の学力保障・進路保障をしていく中で、差別の悪循環を断ち切っていくことは、私たち教職員にとって大きな責務です。

その意味においても、一九七一年度より芦屋市、とりわけ市立芦屋高校で行われてきた進学保障の取り組みは、全国的にみても先進的なものでした。また、それは、地域の生徒は地域の学校でという、小・中・高一貫した教育を目指すものでもありました。そのために、中学校と市立芦屋高校との間で、綿密な中高連絡会がもたれてきました。そして、この取り組みの中で、これまで家庭環境や経済的理由など、被差別的状況におかれているために高校進学を断念せざるをえなかった生徒や「障害生」の進路が辛うじてある程度保障されてきたのです。

また、このことは、市立芦屋高校が、高校全入を目指す市民運動の中から創り出されたことを考える時、その創立の願いを実現するものであったと考えられます。

しかし、三年前より「教育改革」「教育正常化」の名のもとに、中高連絡会の一方的中止、市立芦屋高校の教職員の不当な配転、定員内切り捨てという信じられない事態が起こされています。その中で、八七年度三三名、八八年度二二名、八九年度一六名の生徒が、市立芦屋高校を希望しながらも、その道を断たれてしまったのです。まさに、これまでの先進的取り組みを大きく後退させるものです。

今年もこのような状況の中で、生徒たちは大きな不安を抱きながら市立芦屋高校への進学を希望しています。

昨年度は、定員内切り捨ては行われなかったとはいうものの、進学保障制度が定員の枠外のものであることを考えた時、「進学保障制度が存続している」とも「定員内切り捨てがなかった。」とも言いきれない状況にあるとも言えます。したがって、今年度も同じ事態が引き起こされることのないよう、次の二点について、切に要望します。

記

一、「定員内切り捨て」を絶対行わないこと。

二、中高連絡会を再開し、進学保障制度を完全実施すること。

資料2　芦屋地労協から芦屋市教委への申し入れ書

受験競争の緩和をめざし高等学校芦屋学区の完全独立と市立芦屋高等学校の定員内不合格を出さず、ゆきとどいた教育を保障するための教員加配を求める申し入れ

貴職におかれましては、高等学校の学区問題において神戸第一学区との合併推進に熱心な御様子ですが、今後の生徒激減期を迎えまず取り組むべきは希望する子供達の全員入学でなければならないと私達は考えます。合併では、芦屋の子供の開門率が下がりこのこと

の実現が望めません。受験競争を二十一世紀まで持ち込む事なく、教育が学歴取得の手段でなく、真に「人を育てる」事を目指さなければなりません。

今年も公立高等学校の入学試験が近付いて参りました。市立芦屋高等学校「改革」の名の下に定員内にもかかわらず大量の不合格者を出したことにより、市民の「十五の春を泣かせない」との願いの中から生まれた市立芦屋高等学校の存在そのものが危うくなり、「義務」化しつつある高校教育が本市においては後退させられました。

また、ベテラン・中堅教員が一挙に強制配転させられたことにより、市立芦屋高等学校での教育活動に大変な支障をきたしていることが、毎年の大量の留年生・退学生を出し、大学進学率の極端な落ち込みから窺い知れます。

こうした点から以下の内容を申し入れますので、誠意をもってご回答願います。

記

一、高等学校の学区制については、芦屋学区の完全独立を実現すること。

一、市立芦屋高等学校の入学希望者を少なくとも定員内で切り捨てないこと。

一、市立芦屋高等学校の教職員定数を引き上げるとともに、強制配転させた教員を原職に復帰させ、ゆきとどいた高校教育を保障すること。

一九九〇年三月一五日

芦屋地方労働組合協議会議長　若林伸貞

芦屋市教育委員会　教育長　松本壽男殿

資料3　市芦分会抗議文

一九九〇年三月二〇日

芦屋市立芦屋高等学校

学校長　泥　純一殿

兵高教阪神支部市芦分会

芦屋市立芦屋高等学校教職員組合

執行委員長代行　深沢　忠

抗議ならびに要請書

貴職は、一九八七年、一九八八年に引き続き、一九九〇年の市芦の入試において三度目の定員内大量不合格者を生み出し、生徒と親の高校入学と高校教育への願いを高校の門前で切って捨てた。

私たちは、こうした貴職の教育者としてあるまじき行為を危惧して、事前に「定員内切り捨てを行わない」旨の要請を行ってきました。

さまざまな形で行われた交渉の中で、市芦泥校長は、「入学者選抜は校長権限と言われても、教育委員会の指導があるので、私の一存ではいかない」といい、市教委は、「入学者選抜は校長権限である」といい、それぞれが無責任な言い逃れをしてきた。しかしながら、一九八七年、市芦前田校長が「私は禁治産者のようなもの」と職員会議で発言するほどの市教委の圧力によって、市教委の指導通り三三名の定員内大量切り捨てが行われた事実がある。また他方では、一九九〇年三月一六日の芦屋地労協との交渉の中で、三好指導部長が、「定員内で生徒を不合格にするようなことは起こらないと思う」と発言している事実もある。

どのように言い訳しようとも、その責任は、市教委・学校長の双方にあるのは明かである。

こうした生徒の教育権をいっさい無視した行為をなされた以上、それぞれの責任に頬かむりをし、素通りすることが許されるはずがない。その責任の所在を明らかにし、下記の通り実施されることによって速やかにその誤りを正されることを要請する。なお、三月二四日までに回答の場を設定されたい。

記

一、不合格者を補欠入学させるか、再募集によって不合格者の入学を保障すること。

障害児の定時制進学を保障せよ
定時制通信制の統廃合を許すな

市芦救援会事務局

兵庫県教委による「中間報告」は、「定時制の生徒減少」を一つの口実として、定通統廃合を画策しています。しかし、芦屋市内においても、この間の「教育改革」の中で市芦を定員内で切り捨てられた生徒が、定時制からも切り捨てられているのが現実です。

また、「教育改革」は、市芦・定時制受験をもあきらめてゆく生徒を多く作り出しています。

定時制を落とされ、徹底的に劣等感をおしつけられ、ガソリンスタンドのアルバイトを続けようとしても、その影を背負って長つづきできないでいる生徒達がいます。

とりわけ障害児にとって、定時制の存在意義は大きいといわざるをえません。

「普通学級にいてもひとつもええことない」というしんどさを持ちつつも、一貫して普通学級に子供を通わせ、地域の子供達とのつながりを求めてきた親たちがいます。クラスの中で少しづつ子供同士の触れ合いができてきても、いざ高校進学という時、その門戸は長く固く閉ざされてきました。

市芦の「教育改革」で、障害児の進学保障制度はまっ先につぶされました。親を中心にして「麦の家」を創り、一年間の在宅生活をのり切り、ジュン君・ムー君は昨年定時制に進学しました。宝塚の大谷君は養護学校卒業後、定時制進学をかちとりました。

かれらが昼間きつい労働現場に身を置きながら通学する同世代の生徒たちと少しの間でも触れ合っていく中で、得ていくものは大きいといえます。

西宮西高校にムー君が通いはじめてしばらくして、髪の毛を赤く染めた女の子らから、「やぁームー君！元気！」と声がかかる。職員室での教師との触れ合いも含めて、そんな少しづつのつみ重ねが、一日一日の学校生活を支えていくものになっています。

宝塚におけるとりくみ

昨年、尼崎南高校良元分校に大谷君が進学をかちとり、今年つづいて児玉君が挑戦しました。

児玉君を九年間普通学級に通わせ、でも「本当に良かったと思うことは、ほんのわずかしかなかった」とお母さんは言われます。しかし、普通の中学はとても無理と思いつつ、沢山の友達が「ヒロ君また中学で同じクラスになるといいね」といわれ、「テストで点はとれなかったけれど、六年間の間に友達という大きな宝物ができたのはうれしい」といわれます。中学三年生で進路のことが気になった時、「浩君どこの学校へ行くの」と心配する友達のことを聞いて、「小・中学校と同じ様に、皆の中で過ごさせてやりたい。人に迷惑をかけながら、そして、人にたすけられながら生活して行くのが一番いい」と、良元分校への進学を決意されてきたのです。

同じ宝塚で、障害をもつ親が中心となって作られている「障害児・者問題何でも話す会」のお母さん達、親や子を励まし共に歩んできた教師達が、児玉さん親子の願いを全面的にうけて、必死のとりくみがつづけられました。

しかし一方で、障害児を普通学級から締め出し、定時制からも締め出そうとする動きは全県的にもみられ、きびしい闘いとなりました。

たとえば、養護学校について、確かにその高等部全入の動きは運動の質が異なったもの

であったとしても、行政側からの「全入」切り崩しが行なわれてきています。とりわけ神戸市・阪神間において、親の運動の中で、重度・軽度を問わず全員入学をかちとってきました。

しかし、障害の程度によって、重度の子を学校から締め出す動きが、高等養護学校構想としてあらわれています。

そしてついに今年の県立養護学校高等部の入試において、定員一杯の受験者であったにもかかわらず七人が不合格にされたのです。

十年間におよぶ、阪神間の全入の闘いをつぶしにかかってきているのです。重・軽度に分けることでの親の対立をも激化させることで、切り崩しをはかっているのです。

さらに、小・中を普通校・普通学級で学んだ者を、養護学校から排除する動きもみられます。ただでさえ進路を閉ざされてきている障害児に対し、普通学級にいることが一つの進路を閉ざすおどしを行政がかけているのです。

宝塚においては、普通学級へのとりくみをすすめてきたがゆえに、一層きびしい切り崩しがはじめられている。宝塚市議会における「嫌がる親を強要して行かせている」として、普通学級への運動に対する攻撃が行なわれました。

障害児の進路に関するこのようなきびしい状況下で、また一方の定通つぶし・統廃合の動きの中で、児玉君の定時制入学のとりくみはすすめられてきたのです。

昨年良元分校に入学をかちとった大谷君は、児玉君の入学を願って良元分校の生徒に署名を求め、わずか一日でその日登校していた六四名の生徒全員の署名をあつめきったといいます。

また、兵庫高等学校教職員組合（兵高教）・定通つぶしを許さぬ会からも、兵庫県教委に対して定時制定員充足を求める要望書が出され、全県的に多くの支援を得ながら、残念ながら児玉君は不合格となりました。

三月二一日、児玉君の定時制切り捨てに抗議する集会が宝塚市内でもたれました。祝日にもかかわらず、県下からの支援者も集まり、一二〇名余の集会となりました。

「一〇〇％ダメやとわかっていながら、児玉君の番号だけがないのを見て、お母さんが泣きくずれるのを見て、仲間も皆んな泣き、それが怒りとなって、涙と鼻水とでクチャクチャになっての汚ない校長交渉をしてきました」との経過報告をうけ、各地でのとりくみが話されました。芦屋の麦の家の北川さんから、今年武庫高校に挑む菅原孝司君の話が出されました。昨年一年、ジュン君・ムー君の在宅から西宮西高校への進学をかちとってきた麦の家の一員として、またあらたに在宅を覚悟して闘いというきびしい話が出されました。

しかし、各地の重たい話の中にあっても、障害児の親が持つ独立の「楽天的」部分も垣間みえました。神戸の定時制に子供を通わせている母親から、「授業参観日にいったら、他の子は寝てたり、隣りの子とおしゃべりしたりして、黒板の字をうつして勉強しているのはうちの子だけでした（笑）、でもどこかホッとしたんです（笑）、小学校から管理・規則ばっかりいわれる時代になって、定時制という所はこれがいいんやと思います。昼間一生懸命働らいて、夜勉強してるんですよ。定時制という所で、どこかホッとして触れ合うことが大切なんやと思います。こんな定時制のよさをつぶさんといて下さい。もっと定時制が必要なんです」といわれる。

母親たちの悔しさを受けてたとうとする教師、それ故にもっともきつい批判をむけることではげます親。宝塚もこれから寄り集まる場所を求めて長い長い春休みを支えていく体制づくりに入っていくことになります。

芦屋におけるとりくみ

芦屋の地においても、昨年のジュン君・ムー君につづいて、菅原孝司君が定時制を受験します。「麦の家」の一員として、中学校三

年間を普通学級ですごしながら、時として登校があやぶまれる日々をすごしてきました。しかし周囲の親たちの支えの中で定時制受験を決意しています。

ムー君の母親英子さんは、この一年間のムー君の「成長」ぶりについて、「これができた、あれができたということではなく、心の通う言葉を生み出してきた。また、一人で通学するという生きる力を身につけられた。何がおこるかわからへんけど、やっぱり高校っていいな」といわれています。

このように地域であくまで生きる場を求める親たちの闘いは大変きびしいものがあります。

菅原孝司君のお父さんは、「これからも人に迷惑をかけることもあるし、助けられもしながら皆の中で過ごさせてやりたい」と、地元の定時制への進学を切望しています。

三月二八日(水)に、彼の進学を励まし、地域の高校にかかる問題を話し合う集会がもたれます。中学校・高校の教師・市民が広く集まり、地域の定時制を守り、障害児の教育の保障をめざしていくとりくみを確認してゆく集会として設定されています。

息の長い闘いになりそうです。多くの方々のご支援をここに要請するものです。

資料1　良元分校への要望書

児玉君の良元分校入学を切に願って

障害児・者問題何でも話す会

児玉浩之君は、今年三月で九年間の義務教育を終え、高司中学を卒業します。親にとっても子にとっても嬉しい卒業の春なのです。しかし、浩之君のお母さんが今どのような気持ちでこの卒業の春を迎えようとしているのかを考える時、同じ障害児を持つ親としていたたまれない思いにかられるのは決して私たちだけではないと思います。

私たちの子供は、保育所に入れて欲しいと言った時、障害児は手がかかるからとなかなか入れてもらえませんでした。

小学校に入学の時、頭のてっぺんから足の先までジロジロ見られ、できないことをイヤというほど並べられ、親が普通学級にと言っているにもかかわらず、この子にとって一番良い所と言って、養護学校を勧められました。

中学校に入るときは、学科毎に教師が変わり子供がついていけないとか、中学生は自分のことでみんな手一杯で、小学校の時みたいにかまってくれませんよ、と普通学級が難しいことを小学校側からも、中学校側からも何度も言われました。

浩之君が中学校に進む時、お母さんはずいぶん悩みました。お母さんは、六年間を振り返って「いいことはあんまりなかったけど、何人かの親から『子供が中学校でも児玉君と同じクラスになれたらいいのに、と言ってるのよ』という話しを聞いて、本当にいいことは何もなかったけど、六年間普通学級に居り続けたからそんなふうに言ってくれる友達が出来たんやないかと思う」と言って、「学生服のズボンのチャックを自分ではずしておしっこできるやろか」、「学科毎に先生が変わってだいじょうぶやろか」というたくさんの心配と不安を残しながらも、高司中学校の普通学級を選びました。

しかし、お母さんの胸の中には、せめて三年長く学校に行けるのであれば、中学校から養護学校の中学部、高等部に行った方がいいだろうか、中学校も普通学級に行ったらたぶん、高等部に行くのは難しいだろう。中学卒業後、どこにも行き場がなくなることを思え

ば、養護学校に行った方がいいんとちがうやろか。皆が心配してくれるのは嬉しいけれど、どうにもなれへんという思いが強く残っていました。

そして、普通学級に決めた時、私たち親と児玉さんやそれに周りでささえてくれた教師たちに、何か一つでも明るい希望や、確実なことがそこにあった訳ではありません。ケガして帰ってきても文句言いに行かれへんかったし、体もあんまり丈夫ちがうかったからみんなと元気に過ごせたというほどでもないけど、遠足行ったら好きなカレーを三杯も食べて帰ってきて、もうこれ以上の満足はないという顔して、足には大きなまめ作って帰ってきたのに「楽しかった、楽しかった」と寝るまで言っていたこと。修学旅行で枕投げしたり、お土産を買うのに友達が最後まで付き合ってくれたり（お母さんはそれが嬉しくてお土産のまんじゅうを近所に配りました）普通であればなんでもないただの日常であるこんなことが励みになり、喜びとなって六年間普通学級に通い続けられたんやったね、という話しを繰り返しただけでした。そして最後は、嬉しかったことも辛かったことも含めた子供の生活を守る為だけに親は頑張らなアカンのちがうやろかという話があっただけでした。

浩之君も含めた何人かの子供たちは、普通学級に通いながら特別教えてもらった訳でもなく字を書いたり読んだりします。それは必ずといってよいほど自分の一番好きな子供の名前であったり、もっとも身近な友達の名前であったりするわけです。浩之君は、小学校の六年の時、「一緒に中学校に」と言ってくれた友達の名前を全部漢字で書いて、お母さんを驚かせました。お母さんは、字を書いたことに驚いたのではなくて「一緒に中学校に」と言ってくれる友達が浩之君にいて、それを浩之君がわかっていたということでした。

卒業を目前に控えた児玉さん親子にまず、私たちができることはお母さんから浩之君を離すことだと決め、毎週日曜日と祭日には外に連れ出すことにしました。しかし、お母さんは最初「こんなうるさい子、先生等に見てもらえないわ、どっか行ってもすぐ帰ろ帰ろ言うし、とても大変よ。それに先生たちにも生活があるのにとてもそんなこと頼まれないわ」と休みの日には朝からカベをたたいたり、文句をブツブツ言い続ける浩之君を、それでも自分で見てる方が気が楽ですから、と言ってなかなか離そうとしませんでした。

今浩之君は、毎週日曜日にうるさい（？）お母さんから離れ、友達（？）の教師と飛行場に行けることを楽しみにしています。この三月、児玉君親子は泣いても笑っても最後の進路の選択を迫られています。しかし、現実に児玉君親子にどのような進路の選択が残されているでしょうか。このことを思う時、私たちは去年大谷喜久君が「このまま施設に行くのはいやや、人に迷惑かけるかもしれんけど、今しかないんや、俺は高校へ行く」と宣言して、尼崎南高校良元分校に進んで行ったことを思いださずにはおれません。

施設か在宅かしか残されていないその絶望の進路の中で、たった一つ大谷君が捜し当てた行き場所が定時制高校であった訳です。その時、大坪校長は「他に行くところはないのか」と暗にあきらめるように言い、藤本校長（養護学校）は「高校落ちても生きてる人もおる」と落ちることを前提にした言葉を大谷君に投げつけていたのでした。

そして、大谷君が何故養護学校を出て定時制高校に行きたいのかについては、「公平を欠く」と言って耳も貸さず、「何故良元分校に来るのか」と厄介者扱いをして、大谷君が定時制を受験することは「いいとも、悪いとも思わない」と全く他人事のような返答を繰り返していたことを思い起こさずにはおれません。

私たちの子供のほとんどは、自分のことを言葉や文章で人に伝えられません。辛いこともすぐにわかりません。嬉しいこともすぐにはわかりません。痛いことも、悲しいことも、悔しいこともすぐには人にわかってもらえません。何日もして初めてケガの原因を知ることもあります。何ケ月もして友達から「悔しかったこと」を聞くことがあります。何年もかけて、学校という場所にやっとなじむことができ始めて、母親から離れることができるのです。障害を持つ子にとって、長い一日の学校生活の中の、わずかな友達とのふれ合い、それを何年も積み重ねることでしか、この子らは自分で自分の仲間と居場所を見つけだしていくことはできません。

そんな私達の生活にとって、「俺は高校へ行く」と宣言して定時制を唯一の進路として選んだ大谷君の生き方は、まさに我が子の生き方と重なるものでありました。この宣言を私たち親は、我が子の声として、言葉として何度も何度も読み返し、その思いを胸の奥深くで聞き続けてきました。

大谷君は、この一年を振り返って「（体育の時間のことを）『バリしんどい』とかは、ほとんど見学だから言えないけど、みんなと一緒におれて、別に楽しくはないけど、いいもんや」。そして「はしの方でマットにころがって見ていると、『もっとこっち来いーやー』と女の子達がマットをずるずる引っ張ってまん中に連れていかれた。俺はラッキーと思った」。こんなことも思いながら、時には「……でもこんなこともあった。車イスをかついでもらって階段を上がっている時、『こんなこと四年間もせなあかんのか』と。俺は別に頭にこなかった。正直に言っていると思ったから。」と書いています。そして最後に「別にうちのクラスのみんなとワイワイ話しをするわけでもなく、わずかの友達の話しうたら仕事のことで、そんなに話せないけど何か居やすいし、俺の性格におーとっていい所なんや。本当に養護学校の時より楽なんや。いろんなことがあるけど、自分にむちゃをしなくてすむから。二学期はこんなこと言ってられないかもしれないけど、ここ行けてバリよかった」と結んでいます。

大谷君の定時制での一年間の生活は、私たちが普通学級に子供を通わせる中で常に思い続けてきたことです。そして大谷君が、「こしかない、今しかないんや」と思い定めた通り、児玉君にとってもやはり「ここしかない、今しかないんや」と私たちは思っています。

学校や先生方にとって不安や疑問があることは充分承知しているつもりです。そのための話し合い、協議等には私達も全力をあげて協力していくつもりです。

障害を持って生きていくことが、親にとっても子にとっても身を切られるような思いの積み重ねであることをここに全て書き尽くすことはできませんが、少しでも知っていただいた上で、障害をもつ児玉浩之君が大谷君に続いて尼崎南高校良元分校に入学できることを切に願って、ここに要望書を提出いたします。

資料2　「定通つぶしを許さぬ会」の申し入れ

今年もまた高校進学を目指す生徒を抱える親にとって胃の痛くなる時期を迎えました。ここ数年に比して今年は中学卒業生が減少したというものの、全日制高校の開門率は依然として固定されたままで、必然的に全日制不合格者が多数定時制高校を希望することになります。またその定時制にも入学できぬ中卒生が卒業生全体のおよそ五%、なにもかも宙ぶらりんのままで社会に放り出されます。教育基本法にいう「教育の機会均等の保障」の精神はいつまでも有名無実のままです。

昨年、車椅子に乗る重度障害者大谷喜久君が尼崎南高校良元分校へ入学しました。養護学校の高等部を卒業している大谷君は「勉強が嫌いやのになんで定時制にいくのか」と自問し「今施設へいけば一生出られへん。俺は世間で暮らしたい」と答えています。そして一年たった今、大谷君はクラスの生徒と共に学び、遊び、表情は青年らしい逞しさがみなぎり生き生きと輝いています。

また、昨年、ある定時制高校に入学した重い知恵遅れの二名の生徒がいます。

そのうちの一人は言葉を発することができず、多動性で、電車に乗ることが大好きで、親や周囲の目をかすめての一人旅も一度や二

度のことではなく、遠く紀州の果てから迷い子の通報があったこともあると言います。その彼が、入学して一年がたとうとする最近では一人旅を自制するようになったばかりか、母親に「おかあちゃん」と呼びかけるようになりました。

いま一人は、最近になって「仕事がしたい」と言い出して、新聞の夕刊配達を始め出したといいます。

このような『成長』の土台は、学校教職員のご苦労もさることながら、彼等が同世代の、しかも働く青年たちと共に生活する場を保障されたところにあると思います。

知恵遅れの生徒を「学力」という物差しで切り捨てるのではなく、共に生きる生活者の一員として受け入れ、彼等の生活力を高める取り組みに力を注いでいる学校が他にも何校かあることを知っています。これこそ、受験勉強に拘束されない、定時制高校ならではの人間教育ではないでしょうか。

一方で、この数年、クラス定員が三八名から四〇名定員となっても、定員を上回る志願者を数える定時制高校も多く、希望者の全員入学が果たされていない状況があります。さらに、入学後、クラス定員が留級生を含めると五〇名にも達し、就職指導・生徒指導に忙殺され、行き届いた教育活動が非常に困難な状態にあるとも伺います。しかし、その最大の原因は、中卒生急増期になんらの対策も講じず、すべて現場任せとして放置した教育行政にこそあるのであって、そのしわ寄せを入学希望者に押しつけ、彼等の切なる志望を踏みにじるようなことが繰りかえされてはなりません。

定時制高校は、他のあらゆる高校への進学の道を閉ざされた生徒たちにとって、最後に残された学校なのです。そこからも門前払いを食らわされるとすれば、彼等の底しれぬ不安をいやす何が残されているというのでしょうか。

兵庫県教委は昨年「高等学校教育問題調査研究会」の「中間報告」を発表し、大規模な定時制高校の統廃合と単位制高校の設置を方針として打ち出しています。これが強行されると、定時制高校を必要とする生徒の多くが、今以上に高校教育の機会を奪われることになるのは必至です。前記の「障害」生徒たちはいとも安易に再び制度として世間から弾き出されてしまうでしょう。私達はこの定通教育の根底からの変質・解体ともいうべき統廃合計画・単位制高校設置を阻止するため全力を上げて取り組みます。同時に、労働と教育、生活と教育の場である定時制教育の内実を一層深めていく取り組みが望まれます。そのため、今年度入学者選抜試験にあたり以下のことを申し入れるものです。

記

一、貴校への入学希望者数が入学募集定員に達しない場合、希望者全員の入学を保障してください。

二、万一、定員内にもかかわらず不合格者を出した場合、その理由を明らかにしてください。

一九九〇年三月

「定時制通信制高校つぶしを許さぬ会」
会長　玉田　勝郎

資料3　抗議文

兵庫県教育委員会殿
尼崎南高等学校良元分校校長殿
障害児・者問題何でも話す会

障害児の定員内不合格に抗議する

尼崎南高校良元分校は、今年度の入試において定員内にもかかわらず不合格者を出しました。四十名定員に対し三十一名の受験者であったにもかかわらず、児玉浩之君一人を不合格にしたのです。

東京では三十五名の障害児が都立全日制高校及び定時制高校を受験し、すでに定員以下の定時制高校を志望した者は、たとえ0点でもほとんど合格していると聞きます。現在全日制で不合格者三名も受け入れるようにと署名の輪が広がっています。

ところが兵庫県においては「普通学級に通う者は、卒業後養護学校高等部には受け入れない」と県教育委員会は言明されています。障害を持つ子供の進路はとても狭く、施設か在宅を余儀なくされています。しかし、その立ちはだかる壁を穿つかのように、兵庫県下の神戸、伊丹、西宮の市立定時制高校へ重度の障害者が入っていきました。

昨年、ある定時制高校に入学した重い知恵遅れの二名の生徒がいます。そのうちの一人は言葉を発することができず、多動性で、電車に乗ることが好きで、親や周囲の目をかすめての一人旅も一度や二度のことではなく、遠く紀州の果てから迷子の通報があったこともあると言います。その彼が、入学して一年が経とうとする最近では一人旅を自制するようになったばかりか、母親に「おかあちゃん」と呼びかけるようになったのです。

いま一人は、最近、「仕事がしたい」と言い出して、新聞の夕刊配達を始め出したといいます。

そして、九年間普通学級に通った児玉君の中学校の卒業文集に、小学校の時には寄りつきもしなかった子がこう書いています。「ぼくが一番心に残った思い出は、やはり三年生の時の体育大会です。なぜかというと、児玉くんとメガホンリレーに出たからです。はじめの練習ではうまくいかなくてこまった。しかし、本番のときには、児玉君との息もピッタリ合ってとてもよかったです。」

本当に児玉君にも大谷君に続いて同じ世代の働く青年たちと学ぶ場を与えてやりたかったと切に思います。しかし、その流れに逆行するように良元分校は児玉君を不合格にしてきたのです。

大坪校長先生あなたは、わたしたちが入学を願って要望書を出しに行った時に、「それなら言わしてもらいますがねえ、大谷君をとったために二次で一人落ちたんですよ」と言われました。

私たちは、昨年の大谷君の入学闘争の時のことを思い出します。校長先生は、自分のところの生徒を「定時制の子はこんなん手伝いませんよ。全日制の子なら手伝うと思いますけど」と言われました。

今年大谷君が児玉君の入学を願って良元の生徒に署名を求め、わずか一日でその日登校していた六十四名の生徒全員が署名に応じてくれました。校長先生は自分の生徒の何を見てこられたのでしょうか。

姫路から届いた手紙に「寛士の卒業後の進路のことが一番気がかりです。どの障害児の親もその思いは同じだと思います。できるだけ地域で、皆んなの中で、子供を育てたいと言う思いは、私も児玉さん親子と同じです。校区の普通学級で九年間頑張ってこられた児玉さん親子には、是非地域の普通高校の門を拓いてもらいたいと思います。」とありました。良元分校はこんな同じ障害児をもつ親の願いをもふみにじってきたのです。そして、こうした良元分校の定員内足切りを認め、障害児の後期中等教育の保障を放棄した兵庫県教育委員会の責任は重大です。

今回支援を呼びかけるビラを見て、「何かしたいのですが」「僕ら何したらいいの」と激励の声を送ってくれたたくさんの市民・県民の皆さんを初め、各地障害児親の会、定通つぶしを許さぬ会、兵高教、兵教組宝塚支部、障害児問題を考える兵庫県連絡会議、そして大谷君と共に署名を寄せてくれた良元分校の皆さんの支援を踏みにじって児玉君を不合格にした良元分校大坪校長先生と兵庫県教育委員会を絶対に許すことはできません。

私たちは障害児の普通高校入学を実現するまで全力で闘い続けることを宣言し、障害児（者）と親の尊厳をかけて、ここに強く抗議します。

一九九〇年　三月二十三日

資料4　署名本当にありがとう

大谷　喜久

〝「来たらいいんちゃうん」と思う人書いて下さい〟の署名どうもありがとうございました。六十四名集まりました。三月十四日、分校長先生に署名を渡しに行ったけど「うえから言われてるから受けとれない」ということでした。

三月二十日、児玉君はやっぱり落ちてしまいました。この学校へ来れへんかったら、もうどこも行く所がないということを知っていて児玉君を落としたのか。そのことに対して本当に俺はくやしい。だから先生へ俺の気持ちを書いて渡しました。みんなも読んでくれたらうれしいです。

署名本当にありがとう。

良元分校の先生へ

児玉君が落ちてしまった。これからどうしたらいいんやろう。俺はやっぱりこの学校へ来てほしかった。どこも行き場がないのは俺もいっしょや。俺もこの学校に行けてなかったら家にずっといてると思うし、施設とかに行ってると思う。

俺がここに来たのは自分のためです。養護学校にいたころは、何をしてもちやほやされたり、訓練を自立ということでさせられていた。ちやほやされるのもいややったし、こんな訓練をやっても自立できないと思っていた。だから、すごいしんどかった。

高三になって進路を決めなあかんようになった。仕事がしたかったから職安とかに行ったけど、どこも仕事がなかった。施設や在宅はいややったから何かないかなと思ってる時、定時制のことを聞いた。さいしょはあんまり気にかけてなかったけど、「どんな所かなあ」とか思いだして、すごく行きたくなった。そして親に言ったら「人に迷惑がかかる」とかいろいろ言われて、お母さんは内職を俺にさそうと思って近くの会社に行った。でも、これやったらやっぱり家にいることと同じやし、俺はぜんぜんやらなかった。そして毎日ケンカをしてた。でも親の気持ちもわかるからおちこんでたし、しんどかった。将来一人でくらしたいと思っているし、いろんな人と知りあいたい。やっぱりここしかないと思った。願書を出しに行ったらすごい学校の雰囲気がよかったし、俺にあってると思った。

この学校にはいろんな人が来てるし、俺もこの学校やから一年間来れたと思う。これからも行きつづけるつもりやし、児玉君がやっぱりこの学校へ来れなかったということは、俺がこの学校へ行けなかった場合といっしょやと思う。児玉君は今まで普通校へかよってたわけやけど、もう行く場所がない。俺ももし今、良元分校に行けなくなったら、気が狂いそうになる。今、学校で少しやけど友だちみたいなのが出来てるし、会えなくなるのはいやや。

三月九日から児玉君の署名をしたわけやけど、その時俺が思っていたことは、自分のことを署名用紙にのしてすごくいややった。そして、こんな事をやってややこしい奴やなあと思われて、やっと出来た友だちが逃げへんかなあと思っていた。でも、ほとんど全員書いてくれたし、本当にうれしかった。しかし、分校長はその署名を受けとってくれませんでした。あの署名はやはり「来たらいいんちゃうん」と思って書いてくれたわけやし、でもそれを雑音と言われてしまいました。「うえから言われてるから」と言って受けとれないのはへんやと思う。分校長先生が俺がどういうことでここへ来ているのか、どんな気持ちで署名をとったか、本当にわかっているのか。「お母さんたちとちゃんと話をしてるからわかってる」と言ったけど、何にもわかってない。本当にわかってると言うんやったら、落とせないと思う。ここしか行く所がないんです。俺も月に二、三回ぐらい遊びに行くだけで、あとは学校しかない。この学校がめっちゃ大事なんや。

一九九〇年　三月二十二日

大谷喜久

資料5　今年もまた強配か

宝塚養護学校分会ニュースから

さる九月の定例市議会において、B市議会議員の一般質問を受けて、強制配転宣言とも言うべき教育長の「養護学校という所に向かない素質の教師は人事で」との発言が行われた。

露骨な教育長答弁

教育長の答弁は次のようなものである。

「（前略）次に養護学校の問題でございますけれども（中略）本年度かなりいろいろ御指摘御批判がありました。一つの改革はやったつもりでございますけれども、これで満足ということにはまだなっていないように思います。したがいまして、先ほど申し上げましたように研修を積み重ねておりますから、その研修の成果、それから教員の勤務、それから熱意というようなものの養成に力を注いでまいりますけれども、なかなかやはり養護学校という所に向かない素質の教師も出てくるかもわかりませんから、そのときには人事も含めて考えるということで、何とか信頼回復に向けてやってまいります。」（議事録より）

私たちは昨年から分会ニュースの中で「養護分会に強制配転の策動がある」と書き続けてきた。

今度の教育長発言で明らかになったように昨年度の養護分会人事は、「学校間交流」「人事刷新」「年限人事」という方針を隠れみのにした政治弾圧であった。

高校って、ええんやなあー

永岡　英子（麦の家）

基「イシノミヤ、イシコーコー（西宮西高校）」「トケイ（何時にいく？）」

母「四時三十分よ」「まっててね」

基「ウギノイエ」（麦の家に行こうよ）「ウルマ（車の方を指さす）」

母「そやね」「ごはん食べたら行こか」

毎朝、この会話で始まる。その後、一日のスケジュールについて聞いてくるんです。誰とどこへ行くことなんかを楽しみにしてるみたいです。

保育園を卒業して、小学校へ入学する。卒業して中学校へ入学する。そして、中学校を卒業したら……。

きっと自分もまわりの雰囲気、友達の日常の会話などから「コーコー」高校というところへ行くんだなあと思ったようです。

芦屋には市立芦屋高校（以下市芦）へ入学するにあたって『進学保障制度』というのがありました。

それは、点数のみで評価するのではなく、高校を必要とする子供達で被差別部落や在日朝鮮人、障害児、ごんたな子や勉強についていけなかった子、さまざまな社会の状況の中で切り捨てられようとする子供達を守るための制度です。（一九七二年より実施）

基にとって市芦は同じ学年の友達が何人も行くし、家から通うにも、中学校と同じくらいの距離でしたので、その制度を適用して入学できるように学校とも話し合って取り組みました。

ところが八六年度から市芦を国際文化都市にふさわしい進学校につくりかえるということで〝教育改革〟の名のもとで、市芦と市教委は実質進学保障制度を廃止するというので

す。

基は0点に決まっているわけです。

私達はこの制度を守ろうと、過去一五年あまり続いてこの制度の中で高校へ行けた五〇数名の障害児やその家族と、これから行きたい、行かせたい障害児やその家族、又、この制度を守ろうとする先生や地域の人達に呼びかけて集まりました。市芦と市教委に何度も話し合うよう交渉をもとうとしましたが、挙げ句は警察動員のうえ阻止されてしまいました。

「麦の家」誕生

入試の結果は定員内にもかかわらず、進学保障生として受験した障害児三名を含む三三人が落とされました。

進学保障制度を守り、障害児の高校入学を願って集まった人々の憤りは激しく燃え上りました。

現実に在宅になった基と、ずっと普通学級で過ごした佐々木潤一君と、家族でかかえるのではなく、仲間で支え合おうと芦屋の中に障害児・者が地域で生きるよりどころを仲間の手でつくる決心をしました。

「障害者が街で共に生きる。みんなの麦の家」がその年の五月に誕生しました。

麦の家ができて、集まったものの何をしていいかまったく分かりません。試行錯誤で繰り返す中、バザーを開いたり、共同購入を取り入れて、障害児やその家族が地域でつながりをもつ手だてとして活動を始めました。

だけど基は春休みが過ぎ、弟達やまわりが学校へ行きだしたのを見て、自分も学生服を手に持って、「ガッコ、ガッコ」といいながら用意をするのです。

「ムー君はまだ春休みよ」と言い聞かせました。しかし、こんな毎日が続くと基もだんだん怒り出して、ある時期は一日中、とめどもなく食べたり、気にいらないことがあるとすぐ服をビリビリ破ったりしました。夜もなかなか寝ないでいる日がありました。

外に飛び出して電車に乗ることも増えたので、私がつきっきりでいると、朝五時前や、夜一一時すぎと家族が寝入った頃、ぬけ出すようになりました。

潤君は初めは、よく麦の家に来ていたのですが、だんだん嫌がるようになり、来なくなってしまいました。

私達はこれで良いのかと何度も話し合いました。やっぱりこの子達は同じ年頃の仲間といるのが自然や、ここは大人ばっかりだと気がついて、友達が集まるようにレクレーションや、ギョーザパーティ、焼き肉パーティといろいろ考えてやってみました。でもそのときは楽しいのですがなかなか続きません。

西宮西高校へ

私達はつくづく、

「学校っていいよね。同じ世代の子が四〇人程集まって、毎日一緒にいられる場なんて作れないもんね」

高校、ないかなー。探してみよう。一回で諦めないで、あたってみようと話し合っているうちに、

「定時制高校はどうだろう」

「このへんだったら、市内には武庫高校があるし、となりの西宮に西高校がある。ここには中学時代の子もいるよ」と話しは進みました。

そして私達の思いをこめて、麦の家の趣旨と親の思いを書いた手紙を持って、武庫高校と西宮西高校へ行きました。

そのうち西宮西高校とは話し合う場を持つことが出来ました。

私達は基と潤君とその家族とそろって出かけ今までの思いを心から訴えました。そのそばで、潤君はクラブ活動でボクシングがあるのですが、トレーニングしている学生に混じって縄跳びを始めました。

嬉しそうにピョンピョン跳ねて、

「僕出来るよ。僕やりたい」といつまでもはしゃいでいました。基もそこから離れずじっと見つめていました。

いよいよ受験の日が来ました。基は大勢の中で緊張した面持ちで中へ入っていきました。私達は後は神にすがる思いで、まる一日別室で待っていました。本当に長い一日でした。

面接も終り、部屋から出てきた基は意外に落ち着いていたのでほっとしました。

発表の日、張り出された紙に、

「佐々木潤一。永岡基。……」の名がはっきりと書いてありました。

本人達をよそに親達の喜びようときたら、自分達が入学出来たようにはしゃいで、帰り道に、

「お前、何食いたい。何したい。なんでもしたげるで！」

基も潤一もしらーっとした顔で学校の中をウロウロしていました。

キョーショク・タイソウ・ハンバーグ

四月に入り、基と一緒に私の方が胸はずませて通学が始まりました。基は初めのうちは、学校の流れにはまったく付き合わず、何度も学校からぬけ出して電車旅行を繰り返しました。せっかく入学した学校なのに心配でたまりません。

先生達に基が小さい頃から電車が好きで、電車に強いこだわりを持っていることを話しました。そのことで文字や言葉が拡がったこと、乗り続けることで、知らないうちに社会へ参加して、その中で上手にとけ込んでいることなど、今までのいきさつを話しました。

何か月か経つうちに、基が、

「キューショク。ゴハン。ハンバーグ。サラダ」となにやらいうんです。

毎日内容が変わるので、月初めにもらう給食メニュー表を見ると、その日食べたことを伝えているのです。

それもきちんと間違わずに、言葉でいうのです。聞きとりにくい時、

「何？それ」というと、手のひらに、

「魚。レモン」と文字を使っていくようになりました。

麦の家に来て、皆に、

「ムー君、高校おもしろい」

「うん」

「何してんの？」

「キューショク。タイソウ。ベンキョー」

私達も一緒に食べたことあるんですが、家で食べるよりもごちそうで、小学校、中学校と違って給食室に集まって皆でワイワイしながらとても楽しい雰囲気なのです。

基がすっかり気に入ってしまったわけです。その後だんだん、

「コースケ」

「イシマルセンセイ（担任）」

「オーイシセンセイ（この人、美人で若いのです）」と友達や先生の名前も出てきました。

ムー一人で西高へ行く

二学期の終りごろ、担任の先生が

「ぼつぼつ一人通学にチャレンジしませんか。電車に乗って来ると思いますが」といわれたのですが、私はまだ自信がなくて、

「…そうですね」といっただけでした。

年が明けて、三学期が始まるその日、

「ひとつやってみるか。もし、そのままどっかへ行ってもそれでいいし」と私は基と阪神打出駅へ行きました。

母　「ムー君、一〇〇円で切符を買って西高へ行っておいで」

基　「キップ。ハンシンコーロエン。イシコーコー（切符を買って阪神香枦園で降りて、西高へ行く）」

自分で納得するようにいってましたので、私も、

「そうね」といって見送りました。

急いで家に帰り、麦の家の仲間に事情を話したところ、

「えーっ」といったきりでした。黙ってしまい、私の家へ来てじっと待っていました。

すると学校から電話がかかり、

「お母さん、永岡君登校しました」
「ワーッ。やった。やった！バンザーイ！」
麦の家の仲間と西高の先生と私は電話口で大歓声をあげてしまったのです。

ずーっと今まで一人で学校へ行くことをしなかった基。目を離すとすぐ電車に乗って行方が分からなくなるので、友達と一緒か私がついて登下校を重ねた九年間でした。それが今、一〇〇円玉を一個しっかりと手の中に握りしめて駅の中にかけて行きます。今日でまる二ケ月が経ちました。又、学校から芦屋の打出駅まで一人で帰るようにもなりました。

ただ、打出駅に降りて私が待っていなければ、すぐさまUターンして乗ってどこかへ行ってしまいます。今まで私が迎えに遅れたことで行かれてしまったことが四回程ありますが、本人きっと、

「せっかく帰ってきたけど、お母さん来てへんので、乗っていこー」てなもんでしょう。

今しみじみ思うことですが、ほんま何が起こるか分からへんもんや。やっぱり高校ってええんやなあー。

（「麦の家」通信四号より抜粋転載）

アジアスワニー労働組合への支援と治療費のカンパをお願いします

会分芦市芦分会

とりあえず、ほんの少しでもこの訴えに、力を寄せて下さい。

アジアスワニー労働者の人間としての尊厳をかけた闘いを目の前にして

アジアスワニー労働者の大半は十代後半で、しかも女子労働者であり、夜間学校で学ぶ人が多数だといいます。一枚のFAXでそのすべてを奪うやり方に対して抗議の声があげられています。五名の代表団が来日して、交渉を求めています。不誠実な会社の交渉拒否に対して、二月二十四日から無期限断食闘争に入ろうとしていました。「人間らしく生きられないということ、このように踏みにじられるということは、死んだからだと同じであり、人間として生きることを宣言します。社長に自分の尊厳と価値があるというなら労働者たちにも労働者としての尊厳と価値があります。私達の要求と闘いは労働者としての尊厳を守り、回復するためのものです」といいます。

ハンストを目の前にした二月二十一日、労働組合代表団のメンバー（四名中三名）が突然の自動車事故に見舞われ、重軽傷を負いました。徒手空拳で闘うこの労働者たちへの支援と治療費のカンパをお願いします。

カンパ送付先（スワニーカンパと記入）
市芦救援会 郵便振替口座 神戸七―二二四八八

日本国民の皆さんの良心と正義に訴えます

亜細亜スワニー労働組合

日本国民の皆さん、こんにちは。

わたしたちは、韓国のイリ工業団地にある日系企業、アジアスワニー社の労働組合の代表です。

昨年十月、香川県の本社、（株）スワニーの三好社長は「人員削減や工場の縮小などは話し合いによって行う」というわたしたちとの契約を無視し、日本からのFAX一本で二百三十名の労働者の全員解雇と工場閉鎖を一方的に通告してきました。わたしたち労働者は一瞬にして生存権を奪われてしまったのです。

（株）スワニーは、長い間、韓国の若い女性労働者を低賃金で働かせ、莫大な利益を上げてきました。ところが、わたしたち韓国の労働者が人間らしく生きようと労働組合を作ると、わたしたちの生活のすべてを奪って、日本に逃げ帰ってしまったのです。そして、

一層の収奪をほしいままにしょうと、中国での工場建設を進めています。わたしたちは、三好社長のこのような卑劣な行動を絶対に許すことは出来ません。

わたしたち労働者代表は、この切迫した事情を日本の国民の皆さんの良心と正義に訴え、会社の不当性を明らかにし、ふみにじられた生存権を取り戻すために日本にきました。

昨年十二月二十二日から、わたしたちは十四回の団体交渉を続けてきました。社長は、この間不誠実な態度を変えようとせず、労働契約違反を認め、夜学に通っている労働者への在職証明書の発行など組合に歩み寄るかのポーズを示しながらも「工場再開は不可能」と居直っています。さらに、一月二十一日以降は一方的な「団交ルール」を提示して、これを認めなければ交渉には応じないと団交拒否を続けています。

いま、イリのアジアスワニーでは、零下一五度の酷寒の中で電気も水道も断たれる中で、幼い組合員たちが、工場の中で籠城しながら早急な解決を待っています。私達はいま、民族そして韓国のすべての労働者の自尊心を掛けて闘っています。生活の道を奪われたわたしたちは、お金だけでこの問題を解決することは出来ません。

金儲けのためなら地獄の果てまでいとわずに、地球のあちこちを低賃金を求めてとびまわり、すべてを奪い去り、最後には紙屑のように労働者を使い捨てるという非人間的で、反道徳的な行為をほしいままにする悪質企業家を、かならずやこの地から無くさなければなりません。

そのために、わたしたちは日本の皆さんと連帯し、どんな困難があろうとも一歩もひくことなく闘い続けます。生存権を取り戻し、人間らしく生きられる社会がつくられ、労働者が解放されるその日まで連帯して闘っていきます。

日本の国民の皆さんの暖かいご支援、ご協力をお願い致します。

一九九〇年二月

「さわやかな一陣の風」

崔孝行

この間、韓国に進出した外資系企業（特に日本企業）が、相次いで廃業・休業・人員削減、資本の撤退を開始している。

一九八九年一〇月までに外資企業のうち、廃業一三、休業三、人員削減一五、計三一企業と集計され、これによって失業した労働者は八二二四名にも及び、これは件数にして一九八八年の八倍、失業者数は四倍に達する。

今まで韓国に進出した企業は、韓国労働者の低賃金と無権利状態の上にあぐらをかいて莫大な利潤をあげてきた。しかし、一九八七年七月の労働者大闘争以後、各所で民主労組が結成され、賃金引き上げ、待遇改善を要求する闘いが力強く展開された。このことは、際限のない利潤追求をする進出企業にとって大きな脅威となったのである。

この間の進出企業の経営者達は撤退の理由を「労働運動の高揚、賃金の引き上げによって経営が困難になった」為だとしている。しかし撤退の真の理由は、労働者達の闘いによって損失が生じたとか、赤字になったということではなく、労働者に当然与えられるべき権利を与えてしまうと、いままで低賃金によって享受してきた莫大な超過利潤を見込めなくなってしまうという点にある。併せて偽装廃業によって労働組合をつぶそうとしていることも見逃せない点である。

韓国から撤退もしくはその意向を明らかにしている企業において共通していることは、①赤字を累積させ、会社を倒産させるための意図的な行為を行なう、②労働組合との労働協約を一方的に無視し、一切交渉に応じようとしない、③中国、スリランカ、マレーシアなどに進出し、生産を移転している、などである。

こうした外国人投資企業の撤収の動きに対して、これまで外資誘致のために様々な特恵

を保障してきた韓国政府は、外資企業が撤退するときにも何らの対策も立てずに、むしろ、撤収に反対して闘争する労働者に対して暴力弾圧を行なっている。盧泰愚政権は全斗煥政権七年間を通じた回数よりも多くの警察兵力の投入を行なった。まさに自国民の利益を守るのではなく、どこまでも外国勢力の利益を守ろうとする買弁勢力としての本質をさらけ出しているといえよう。

ある人は「アジアスワニーは日本の労働運動に爽やかな一陣の風を巻き起こした」と表現した。彼女たちは、労働運動に対して限りなく誠実であり、「労働組合」に対して限りない愛情を示した。明るくおおらかなその闘う姿を通して、手垢のついた「人間としての生き方」の今一度の意味を私は教えられた。

この文章を書いている現在、アジアスワニーの闘いは会社側の謝罪を含む妥結をかち取ろうとしている。しかし闘いの中で不誠実な「日本資本」により負傷したと言えるスワニー労働者、支援者は今だ病床にある。また人間として生きる権利を求めるアジアスワニーをはじめとする韓国労働者の闘いは終ったわけではない。

スワニー労働者の明るい笑顔を通じて出会った韓国労働者と私たちの連帯は今始まったばかりと言えるだろう。

アジアスワニー労組と連帯して

全港湾建設支部　中村　猛

昨年暮れ集団解雇の撤回を求めて日本にやってきた亜細亜スワニーの代表団が、近畿一円にさわやかな旋風を巻き起こして、季節が変わろうとする今、日本を去ろうとしています。

闘いの結果については、新聞などでご承知の通りです。

日本での九〇日間の闘いのなかで集団解雇の撤回はできませんでしたが、会社を謝罪させ、生存権補償を行なわせた闘いは、個別スワニー資本だけでなく低賃金労働力を求めて経済侵略を行なう資本家どもを震え上がらせ、日韓労働者の具体的な闘いを通しての連帯という大きな成果をあげました。

闘いにいくつかの山があり谷がありました。その都度、彼女たちはベテランの闘士のように見事にこれを乗り越えました。

二月十二日、団体交渉を拒否し続ける会社の会長と十二時間に及ぶ交渉を行ない警察権力によって排除されそうになったとき、彼女たちは怒りの血書を書き抗議しました。

自らの手を切り、流れでる血で「正常稼働争取」と書きました。あたりの闇のなか、彼女たちの姿だけ蛍光灯のなかで浮かび上がり、悲しげな歌を歌いながら手を振って血書する様子は、まるで舞を舞っているようでした。この余りの迫力に、警察権力はついに手を出すことができませんでした。

命を懸けて闘っている姿は本当に美しいと実感しました。

また不幸な交通事故で、組織部長は一番大事な時期をベッドで過ごすことになりました。彼女の闘いはベッドでじっと仲間の闘いの情報を待つことでした。

ある日突然、彼女のお茶が水に変わっていました。彼女は一人ハンストを開始したのです。

彼女の姿は、労働者はいつどんな状況におかれても、その状況のなかで闘うことができるということを教えてくれました。

彼女たちはいつもこう言います。

「われわれは労働者だ！」

「われわれは偉大だ！」

「われわれはこの地の主人だ！」

一月十日から、六十日間の闘いに参加し、うち三十日を彼女たちと行動を共にさせていただきました。

人間が生きがいを感じるのは、自分のことをやっているときよりも、自分の存在が他人や組織にとって役にたっていると実感できたときだと思います。そんなに長くない人生のなかで、感動に満ちた日々を一日でも多く持つことは、人生最大の喜びです。

解雇撤回、円満退社へ

韓国子会社労組と合意

スワニー

大手手袋メーカー、スワニー（本社・香川県大川郡白鳥町、三好鋭郎社長）が、韓国の子会社「亜細亜スワニー」（裡里市）の従業員二百十七人を全員解雇、撤退を決めた問題で、解雇撤回などを求めて来日していた亜細亜スワニー労組（楊昇淑委員長）代表と本社との交渉が十一日午後二時から開かれ、会社側が昨年十月一日にさかのぼって解雇を撤回、未払い賃金や当面の生活を保障する費用を支払い、労組側は四月三十日をもって円満退社することなどで合意に達した。十三日に調印する。楊委員長らが十二月二十二日に来日して以来、約八十日ぶり。同じ問題で韓国から来日している日系企業三労組の中では、TND労組（軍浦市）と親会社のタナシン電機（本社・東京）に続く解決となった。

（3面に解説）

合意によると、「会社の一方的な廃業通知は、韓国の労働法と団体協約に違反している」という労組側の主張については、会社側が全面的に非を認め、労組と韓国民に謝罪する。一方、「手袋業は韓国では経営が成立しない」との会社側の主張を労組側が受け入れ、工場再開という要求を取り下げた。その代わりに、労組側は当面の生活保障と十月一日から三月三十一日までの未払い賃金としてあわせて約五千万円を受け取ることになっており、互いに譲歩した内容。

このほか①会社側は夜間学校に在学、入学予定の従業員に対し、就学を保証し、卒業までの会社負担分の費用を支払う②韓国で拘束中の組合員の釈放について、会社側は韓国当局に対し、釈放を求める手段を講じる③会社側はこの間、双方の間で起こったトラブルでけがをした通訳らに見舞いの意思を表明する④会社側は労組代表らが安全に帰国出来るよう最大限の配慮をする――なども決まった。

日系企業三労組のうち残る韓国スミダ電機労組も、親会社のスミダ電機（本社・東京）と合意に向けて交渉が進んでいる。

スワニー　組合、工場再開は断念　会社、5千万円支払い

（解説）

亜細亜スワニーの労使交渉が十一日、合意した。昨年十二月二十二日の来日以来、「工場再開」を求める労組側と、「無理だ」とする会社側が対立、交渉は難航していた。しかし、約八十日ぶりに成立した今回の合意では、組合が「工場再開」の要求を取り下げ、会社側が「一方的な廃業通知について全面的な謝罪をし、未払い賃金や当面の生活を保障する費用五千万円を組合に支払う」など、双方が譲り合う、現実的な解決となった。

亜細亜スワニーをはじめ、韓国から撤退した日系企業の三労組は、昨年末から来日し、本社と交渉を続けていた。まず、七日、東京で交渉していたTND労組に親会社のタナシン電機（東京）側が「組合との事前協議なしに清算手続きをしたことに道義的見地から反省と遺憾の意を表す」ことや、「操業再開や自主生産が困難なため、組合に雇用確保対策金五千六百万円と来日経費など約一千万円を払う」などの条件で合意し解決した。今回の合意は、これに次ぐもので、内容的にも似ている。

もう一つ残った韓国スミダ電機労組と親会社のスミダ電機（東京）も解決に向けて、話し合いが続けられており、日韓労使関係は、現実的に「金銭と謝罪」の形で「解決」する見通しとなった。

海外へ進出した日本企業の現地労働者が、日本まで来て交渉を続けたのは、これまでに例がない。

それだけに、解決のルールがなく、スミダやTND労組メンバーは「生存権」をスローガンに本社前でハンストをしたり、デモを繰り返した。スワニーの場合も十日からハンスト闘争に入る計画だった。

それが、このタイミングで歩み寄ったのは、労組代表たちの「ビザ期限切れ」目前、という事情があったからだ。スワニーの場合も今月下旬にはビザ切れが迫っていた。

労組の求める操業再開は認められなかったが、二つの企業とも廃業のやりかたについて非を認め「謝罪」を表明。さらに大幅に金銭的な積み上げをした。

低賃金労働をもとめて韓国に進出した労働集約型の日系企業がより安い賃金の国へ転進するケースは、これからも続発するだろう。しかし、民主化で韓国の労働者の意識は高まっている。再びこのような日韓労使関係が再発する可能性がある。今回の労使紛争は、「労使の十分な話し合いが事前に必要だった」ことなど、さまざまな教訓を残した。

「朝日新聞」（一九九〇年三月十二日付）

国労清算事業団の首切りを許すな

市芦救援会事務局

去る三月九日、清算事業団当局は、一六〇〇名余の労働者の首切りを一方的に通告した。三年前にＪＲへの採用を拒否され、今回二度目の首切りを迫られている。この三年間で全国七二件の地労委で、「地元ＪＲに採用せよ」との救済命令が出されているが、ＪＲ当局の重大な挑戦といえる。国労は首切りを許さぬため全国統一ストライキをすすめており、各地での支援闘争がとりくまれている。九州・北海道からも組合員・家族会の人々が次々と上京し抗議行動を行っている。地労委命令の完全履行は、我々にかけられた不当処分撤回の闘いと連なるものであり、国労支援の闘いを集中してとりくもう。

仕事をする父の姿を思い、父をとりもどそうと願う子供の作文を次に紹介しておきます。

明るいお父さんにして返せ

お父さんは、国鉄で機械のしゅうぜんの仕事をいっしょうけんめいしていました。そして休みの時、お父さんの職場に何度もつれてもらい、いすにすわったり、つくえで本をみたりして楽しかった思いでがあります。

このまえ、しょくばの前を通ったらたてものはくずされてなにもかもなくなっていました。今、お父さんは竹下のせいさんじぎょうだんにはいっています。

国鉄時代は明るく、元気なお父さんだったけれど仕事を首になってからは暗くて、おこりっぽくなり、私はそんなお父さんをみるのが大変悲しいです。

なにも悪いことをしていないお父さんの首を切ったＪＲがとてもにくいです。

私は、一日も早くお父さんがもとの職場にもどり、元気で明るいお父さんにもどるよう東京にもいってみんなといっしょにがんばっていきたいと思います。（本山亜紗美・小四）

（八九年国労博多支部パンフから）

活動日誌〈抜粋〉 1990.2.16～3.16

2・16　阪神地域春闘実行委に参加。

17　ＳＳＫ竹林さん大阪営業所抗議集会に参加。アウシュビッツ展実行委に参加。兵高教神戸市高支部結成大会に参加。

20　国労連帯物販。永島さん千代田工業闘争交流集会に参加。

市教委交渉（「学区制」「市芦入試」への申し入れ）

21　アジアスワニー労働者の首切りを許さない神戸緊急集会に参加。

22　アジアスワニー労働組合争議支援連帯集会に参加。芦屋教育共闘会議運営委員会。

23　分会拡闘委。カニ工船駅ビラ配布。

24　アウシュビッツ展駅ビラ配布。

26　芦屋教育共闘会議代表者会議。はぐるま座講演会に参加。

27　芦教組定期総会で連帯挨拶。日教組法制部長会議で、兵高教から市芦反弾圧闘争支援を要請。

28　市芦・芦教組三中学分会、芦屋教育共闘会議合同で市芦管理職に対し、入試定員充足・進学保障完全実施・教員配置等の申し入れ・交渉。差別事件にかかわる同盟支部の対市・市教委糾弾会に参加。通信№38発送。兵高教阪神支部で市芦闘争学習会。

5　教育共闘会議の「市芦定員充足・進学保障実施」ビラ駅頭配布。事務局会議。

8　芦屋地労協常任幹事会で、市芦定員充足・学区再編反対・強配教員の原職復帰を求める対市教委申し入れを決議。

9　アウシュビッツ展実行委に参加。

10　市芦管理職への抗議行動・校長との話合い申し入れ。アウシュビッツ展講演会に参加。事務局会議。

14　逃亡しつづけていた市芦校長交渉。市議会傍聴。弁護団会議。

15　阪神地域春闘交流集会に参加。

16　芦屋地労協、市芦問題に関する申し入れについて対市教委交渉。芦屋地労協春闘総決起集会・デモに参加。事務局会議。